

岩手医科大学歯学部小児科学講座

今回、我々は、乳歯ならびに永久歯に、著明なエナメル質形成不全が認められ、さらに Taurodontism, 永久歯の多数歯にわたる萌出遅延など、遺伝性エナメル質形成不全症に類似した非常にまれな症例に遭遇した。

患児は、初診時11歳10ヶ月の女児である。妊娠中の母体は、2ヶ月から出産まで、つわりがひどく、薬剤を服用していたが、当患児には、本症例に関連すると思われる既往はなかった。また、血液、尿検査、さらに外胚葉性器官にも異常はなかった。乳歯、永久歯は、萌出時より黄褐色を呈し、表面は滑沢で硬く肉眼的にはエナメル質は認められなかった。また、永久歯の萌出状態は不完全であり、どの歯の巾径も平均値より非常に小さいことから、各歯牙間の空隙は大きかった。

X線所見では、上下顎切歯にエナメル質の薄層が認められたが、他の歯では認められなかった。また、 $\frac{7}{17}$ は Taurodont tooth であった。歯髓腔においては、 $\frac{7}{17}$ を除いて、どの歯も、切縁あるいは咬合面壁に著明な二次象牙質、あるいは、象牙質瘤が認められた。また $\frac{5432}{3} \frac{134}{34}$ が未萌出である。

乳歯の組織学的所見では、咬合面あるいは切縁部にエナメル質は全くみられず、隣接面部にわずか一層認められた。研磨標本では、エナメル質は小柱が不規則で蛇行配列し、一部では、無構造であった。H・E染色では、有機成分の多いエナメル質の残存が確認された。

象牙質では、石灰化の低い部分が一部みられたが、大部分は正常構造であった。またセメント質では、一部エラメズ質を外側より被覆している像が見られたが、構造では、異常はなかった。

以上より、本症例は Witcop の分類する Taurodontism を伴った、滑沢型のエナメル質形成不全型(減形成)と思われた。処置としては、第1に残存乳歯の抜歯、第2に形成不全歯の歯冠修覆、第3に反対咬合に対し Chin cap の応用、第4に可撤式保険装置を装置し、経過観察中である。

演題7 陶材焼付鑄造冠の臨床的適合度に関する検討

○石毛清雄, 三浦幹也, 草深英二, 塩山 司
石橋寛二, 杉岡範明*

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座
岩手歯科技工専門学校*

陶材焼付鑄造は、審美性、耐摩耗性、組織親和性、全部鑄造冠をもつ物理的特性などの点で多くの特長を有

し、当教室の調査結果からも明らかなように、日常の臨床で装着されているすべての陶材焼付鑄造冠が満足すべき適合を示しているとは考えにくい。

演者らは、実験的に検討されたものと臨床応用例とにおける適合の差異、および陶材焼付鑄造冠のより良い適合がさらに恒常性を高めていくための方策を検討する意味で、臨床的適合度の観察を試みた。当教室の臨床術式を用いて陶材焼付鑄造冠を製作し、装着し、支台歯と共に抜去した試料と、約2年前に本学附属病院にて装置された陶材焼付鑄造冠を支台歯と共に抜去した試料IIを用いた。試料I、IIの肉眼的観察を行った後、同試料をエポキシ樹脂脂リゴラックに包埋し、8分割を行い、冠辺縁の適合度、オーバーハング量、位置を万能投撮影にて計測した。

試料Iにおいて、肉眼的観察では残留セメント層が近心隣接面、頬側にみられたが、探針による診査では良好であった。計測結果は、辺縁部 $19\mu\text{m}\sim 98\mu\text{m}$ 平均 $47\mu\text{m}$ 、オーバーハング量 $-20\mu\text{m}\sim +141\mu\text{m}$ 、冠辺縁の位置 $-215\mu\text{m}\sim +7\mu\text{m}$ であった。試料IIにおいて、肉眼的観察では残留セメント層はみられなかったが、唇側の冠辺縁直下の支台歯に着色がみられ、探針での診査では唇舌側が不良であった。計測結果は、辺縁部 $50\mu\text{m}\sim 261\mu\text{m}$ 平均 $154\mu\text{m}$ 、オーバーハング量 $-129\mu\text{m}\sim +217\mu\text{m}$ 、冠辺縁の位置 $-453\mu\text{m}\sim +144\mu\text{m}$ であった。

試験症例の試料Iにおける計測結果から、日常の臨床においても従来の報告とほぼ同程度の適合が得られることが確認された。試料IIの適合度は試験症例に比べてかなり劣る結果が示されたが、実際に臨床に应用された陶材焼付鑄造冠の適合度に関する他の報告と比較すると、ほぼ同程度の値と考えることができる。

陶材焼付鑄造冠の適合度についてはまだ多くの問題が残されており、今後、歯科医師と歯科技工士の協同作業という観点から検討していく予定である。

演題8 ハムスター歯肉溝上皮下血管網と他の齧歯類との比較

○藤村 朗, 伊藤一三, 野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

実験的歯周炎に罹患しやすい小動物として、近年、ゴールデンハムスターが用いられているが、その歯周組織、特に歯肉内縁上皮下の毛細血管網構築に関する研究はほとんどなされていない。さらに、他の齧歯類との比較検討は全くなされていない。そこで今回、我々は実験動物として常用されるマウス、ラットおよび、愛玩用のシ

マリスを用いた。実験材料は、各々の肉眼的に健康な下顎臼歯部頬側歯肉を用いて歯肉内縁上皮下の毛細血管網構築を観察した。方法は動物に腹腔内麻酔を行い、灌流固定後、片顎を一塊として脱灰し、通法に従って、パラフィン切片を作製、一般染色を施し、組織構造を検索した。一方、血管系の観察には、墨汁注入透明標本、および、三次元的な血管網構築の検索として、メタクリレート系合成樹脂(Mercox:大日本インキ製造)の注入鋳型標本を作製し、走査型電子顕微鏡を用いて観察した。

皮付着の幅が広く、上皮付着直下の重層扁平上皮内に乳頭が存在し、その中には毛細血管のループが数列、歯牙を取り囲むように存在する。しかしながら、ゴールデンハムスターは重層扁平上皮は厚いが、上皮付着の幅は狭く、歯牙を取り囲む上皮付着直下の毛細血管ループは、マウス、ラット、シマリスに比較して背が低く、しかも一列であった。これらのことから、ゴールデンハムスターの歯肉が外来刺激に対して反応性が高いのは、上皮付着の幅、および上皮付着直下の毛細血管ループの数の少なさが関係しているものと思われる。

演題9 過疎地域住民の保健医療行動——北海道紋別郡白滝村を事例として

○尾野 守

北海道上川郡剣淵町立歯科診療所

はじめに：昭和56年末現在、北海道には無医村2ヶ所、無歯科医村15ヶ所あり、無医・無歯科医地区まで含めるとさらにその数を増してくる。白滝村は北海道北部山間部に位置し、総人口が1900人に満たない無歯科医村である。今回、白滝村住民の健康生活に関するアンケート調査の結果が得られたので報告する。

方法：北海道紋別郡白滝村住民を対象に系統抽出法に基づき1/6サンプル抽出し、「医療について」「歯科医療について」「無歯科医村について」の3区分からなる調査表を用いて個別訪問面接聴取法を実施した。期間は昭和55年10月から昭和56年2月。回収率50.7%。

結果：1)白滝村住民の日常医療圏は通院可能距離である40km範囲内の遠軽町にあり、眼科や耳鼻咽喉科などの専門治療を含む広域医療圏は旭川市にあるといえる。しかし、この範囲もこの地域では季節変動するのが特徴的である。2)歯科への受診は7~8月が最も多く、「仕事が暇になった」「こどもが夏休みで治療に行くからついでに」等の受診動機を挙げている。この傾向は一般的農村パターンと比較してみると逆現象を呈して

いるようである。また、歯科医院の選択理由には「家に近く交通費が安い」「保険がきく」などを挙げており、白滝村住民にとって歯科治療を受けることは医療費にせよ交通費にせよかなりの経済的プレッシャーがかかっていることが理解できる。

3)無歯科医村であることについての住民の関心は二分されている。「卒後教育の一環として数年間の避地歯科医療の義務化」等々の積極的意見と、逆に「さわぐだけ損」「今後歯医者にはかからぬ」等あきらめからひらきなおりに出る意見とがあり、問題の深刻さを露呈している。

まとめ：白滝村の人口減少は住民の日常生活からさらに健康生活の基盤さえも不安定な状況へと追い込んでいる。「量が増えれば過密から過疎へ流れる」というこれまでの発想には限界があることが、「昭和56年医師・歯科医師・薬剤師調査報告」から読みとれる。北海道過疎地域の医療圏は不完全度を増しながら取縮し続けているのが現状である。こうした過疎地域に対しては「過疎医療公団」のようなものを設立し、自由開業医制とは別枠の方式をとっていくことも考えられよう。

演題10 Sjögren 症候群における唾液腺の特異所見について

○武田泰典

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

Sjögren 症候群(以下SjS)の主病変の座の一つである唾液腺には著明なリンパ性細胞浸潤、導管上皮の増生といわゆる筋上皮島の形成、硝子様物質の出現等が特異的にみられる。しかしながら、これらの所見が如何なる病状を反映しているかは未だ明らかではない。今回演者はSjS 確実例より生検された小唾液腺のうち、高度の変化のみられた2症例を用い、浸潤リンパ球と導管上皮の関連、硝子様物質の本態について検討を加えた。

電顕的に導管上皮間には種々の程度のリンパ球浸潤がみられた。この導管上皮層へのリンパ球浸潤は介在部導管に最も顕著に認められた。このことは介在部導管上皮を標的としてリンパ球浸潤がおこるものと考えられ、抗唾液腺導管抗体等の特異抗体との関連より興味ある所見と考えられた。

硝子様物質は主として筋上皮島内外ならびに導管周囲にみられ、蛍光抗体間接法では一部でIgG, IgM, C_{1q}, C₃が陽性であった。さらに電顕的には微細点状あるいは線状の集簇として認められた。これらの結果より、硝子様物質はSLEにおける腎系球体基底膜沈着物に類似性